

八幡神社所蔵 女神像 解説

高さ五〇・四センチをはかる女神像は、髪を束ねて頭上で結び上げ、さらに左右に振り分けている。丸い顔に目鼻立ちをあらわし、左の襟を内側にして內衣を着し、その上から外套衣（がいとうえ）を着しており、幅広い帯を腰で締めている。右足を曲げ、左足は膝を立てて坐し、右手は右膝の上に置き、左手も立てた左膝の上に置いている。両手先は失われている。

女神像は広葉樹の一本から彫り出しており、像底からの観察では木心が左右に二つ認められる。このことから神像製作に使った木材は枝分かれした部分か、こぶ状の隆起があるものと推測でき、彫刻用には不向きなこうした「クセ」のある木をあえて使用していることから「御神木」など由緒のある木を使ったと考えられる。表面には白の地色に赤の花柄模様や緑の彩色、頬などに墨線で髪の毛などをあらわしているが、花柄の輪郭が墨線であることや花卉に金泥（金粉をニカラで溶いたもの）を使用していることから、後の時代（江戸時代）に施されている。ただ右すねに当たる部分には制作当初の朱色が残っている。

ふくよかな体のポリユーム感からは威厳が感じられ、また丸い豊かな顔に小ぶりの目鼻立ちからは親しみやすさが感じられ、両者が調和した点が、この神像の大きな魅力となっている。

片膝を立てる神像は全国で十二例ほど認められ、いずれもが九世紀から十一世紀までの製作と考えられている。一昨年暮に発見された女神像は大胆で豪快な作風を示しており、一〇世紀後半から末頃の作品とみられる。それと比べると、今回の女神像は表情が穏やかで、全体に丸みを帯びた造形で、制作時期としては先の女神像よりわずかに降る一〇世紀末頃と考えたい。

鳥取県の神像は、これまで三仏寺宝物館にある女神像（鎌倉時代）と一昨年八幡神社の神像群以外には知られないが、同じ八幡神社から県下最古級の神像がさらに発見されたことから、八幡神社の歴史や山陰地方での神道の歴史を明らかにする上で、重要な資料であると考えられる。

（関西大学教授 長谷洋二）